

市民まるごと サポーターを目指して

栗原市における認知症サポーター養成の取り組み

厚生労働省は平成24年6月に示した「今後の認知症施策の方向性について」において、認知症の方や家族への見守り体制の充実を図るため、認知症サポーター養成を引き続き進めることとしています。そして9月に策定された「認知症施策推進5か年計画（オレンジプラン）」では、平成29年度までに認知症サポーター600万人の育成を目指しています。今号では栗原市の認知症サポーター養成の取り組みを紹介します。

栗原市の認知症対策

厚生労働省の推計によると、平成24年度の認知症高齢者数は300万人を超えると見込まれています。この数値は65歳以上の人口の1割に当たり、今後、団塊の世代が75歳を超える平成37年には470万人に達すると想定されています。

栗原市の人口はおよそ7万5千人で、高齢者の割合は32%を占める2万4千人。県内で4番目に高い高齢化率で、今後はさらに増加することが予想されています。要介護認定者数も増加傾向にあり、認定を受けたうちの4人に3人の割合で認知症の症状が認められたことから、市では「認知症サポーター養成講座」をはじめ、「認知症の介護者家族の集い」「地域型認知症予防教室」や「脳いきいき教室」の開催など、認知症対策事業に力を注いできました。

認知症サポーターを増やそう

厚生労働省では、平成17年にまとめた「認知症を知り地域をつくる10カ年」の構想において、認知症を理解し支援する人（サポーター）を増やし、認知症の方が安心して暮らせる地域づくりを目指しています。認知症サポーターとは、この構想の一環として実施している「認知症サポ

ーター100万人キャラバン事業」において、養成講座を受講した、認知症の方や家族を見守る応援者を言います。

- 1 認知症に対して正しく理解し、偏見をもたない。
- 2 認知症の人や家族に対して温かい目で見守る。
- 3 近隣の認知症の人や家族に対して、自分なりにできる簡単なことから実践する。
- 4 地域でできることを探し、相互扶助・協力・連携、ネットワークをつくる。
- 5 まちづくりを担う地域のリーダーとして活躍する。

（厚生労働省）

栗原市では、この認知症サポーターの養成について、「市民まるごとサポーター事業」と題し、平成24年度から5年間で255の行政区すべてで養成講座を開き、サポーターを増やすことを目標としています。平成18年度から養成講座を開催し、これまで5千人を超える認知症サポーターが誕生しています。

養成講座は3人以上のグループであれば、市や地域包括支援センターへ申し込むことで開催できます。市介護福祉課の主任保健師である千葉摩貴子さんは「市や地域包括支援セ

ンターでは、地域の役員でもある行政区長さんや民生委員さん、保健推進員さんなどへも養成講座をPRし、積極的な働きかけを行っています」と開催に向けたアプローチについて話してくれました。認知症の方が地域で生活するには、専門職や介護者だけでなく、地域におけるさまざまな機関の理解や見守り体制が必要になります。



▲福祉体験授業

市内にある5カ所の地域包括支援センターでも、銀行や郵便局、商店、企業に養成講座をPRし、開催につなげています。市内の中学校では、福祉体験授業の一つである福祉実習の前に、認知症サポーター養成講座

を受講しています。事前に受講することで、認知症の理解が深まり、実行にも役立っています。「中学校や高校での受講は、認知症の方を地域で支えるための見守り体制やサポーターの必要性を知ってもらう良い機会になっています。この受講をきっかけに介護の仕事に就いた学生さんの中には栗原市若柳・金成地域包括支援センターの管理者であり、栗原市認知症キャラバン・メイト連絡会副代表を務める千葉礼子さん。

認知症キャラバン・メイトが うかがえます

依頼に応じて、認知症サポーター養成講座の講師を務めるのは、県で開催する研修を受講した、認知症キャラバン・メイトと呼ばれる方たちです。地域包括支援センターや老人福祉施設の職員などがこの研修を受講し、キャラバン・メイトとしてサポーターを増やす活動を支えています。平成23年度まで市内で32人だったキャラバン・メイトは、今年度は14人が受講し、46人に増えています。

認知症サポーターの声

志波姫地区
鈴木 あい子さん

地区の婦人会などと一緒に受講しました。認知症のことはテレビで見たり、聞いたりして知っていましたが、受講してみたら改めて、気付いたこともありました。若い人にもこの講座を聞いてほしいと思いましたね。

栗駒地区
氏家 すみ子さん

地区社協のお茶っ子会で認知症に関する講座を聞きたいという希望が多かったので、開催をお願いしました。認知症の方を家族だけで支えるのは大変ですね。地域の人にも病気のことを理解してもらい、地域全体で見守る体制が大切だと思いました。

JA栗っこ 志波姫支店
佐藤 直樹さん

2年ほど前に養成講座を受講し、症状や対応について学びました。窓口にいらいやお客様の中に、何度も通帳や印鑑を紛失される高齢者の方がおられます。そのようなときには詳しくお話を伺い、認知症の症状かと疑われた場合は、ご家族にも確認していただくなどの対応をとっています。

JA栗っこ 栗駒中央支店
狩野 美香さん

JA栗っこでは全職員を対象に養成講座を行い、700人以上が受講しています。私も2年前に受講し、認知症についての理解を深めることができました。これから身の回りで認知症の方がいた場合、対応などのアドバイスができればいいと考えています。



▲地区集会所を会場に開催

栗原市では、認知症キャラバン・メイト連絡会を設け、おおむね2カ月に1度キャラバン・メイトの方たちが顔を合わせる機会を作っています。連絡会では受講者が理解しやすい講座を目指して情報交換を行っています。

安心して暮らせる 地域づくり・まちづくり

栗原市では高齢化率の上昇とともに、高齢者の単身世帯や高齢者のみの世帯の増加も懸念されています。市介護福祉課の千葉摩貴子さんは「認知症予防は介護予防や健康づくりとも深く関わります。市では関係する課が連携し、取り組みを進めていきたいと考えています。また、今後は受講した方の声を聞き、次の取り組みに反映していきたいと思っています」とこれからの展開について話してくださいました。

「サポーター養成講座の受講が、自分たちに何ができるかを考える一つのきっかけとなり、これからの地域づくり・まちづくりにもつながっていくといいと思います」と認知症キャラバン・メイトの千葉礼子さんは今後の地域づくりへの期待について話してくださいました。「市民まるごとサポーター事業」は、まだ始まったばかりですが、認知症の方だけでなく、誰もが安心して暮らせる地域づくりにつながる取り組みとして、今後の展開が注目されます。